孫との関係に着目した高齢者の主観的幸福感に関する研究

後藤　正幸　研究室
0332172　中村辰哉

1.研究背景と目的

現在、日本の高齢者数は増加し続けており、超高齢社会を迎えようとしている。高齢者は社会全体の中で大きな割合を占めるようになり、この層の活性化が社会全体にも大きな影響を与えるようになると考えられる。すなわち、高齢者が活気のある生活を送ることは社会的にも重要となってくる。そこで、高齢者の主観的な生活の質を向上させるべく、その評価結果の指標である主観的幸福感を高める必要性がある。

主観的幸福感を高める方法の一つとして、ソーシャル･サポートが注目されている。ソーシャル･サポートとは、ある人をとりまく重要な他者から得られるさまざまな形の援助が、その人の健康維持･増進に重大な役割を果たすというものである。従来研究では家族･親戚･友人を調査対象とすることで、ソーシャル･サポートと主観的幸福感や抑うつなどとの関連性が議論されている。一方で、祖父母と孫の関係に言及した研究もなされているが、孫を直接の調査対象としてはおらず、孫と高齢者の関係を詳細に定量分析した研究は行われていない。高齢者にとって「孫はかわいい」、「孫はいきがい」といわれ、高齢者が愛すべき存在として孫があげられていることから、孫との関係が主観的幸福感を向上させる重要な要因の一つと考えられる。

そこで、本研究では孫への感情や孫との行動に着目し、孫との関わりと高齢者の主観的幸福感の関連について明らかにすることを目的とする。具体的には、高齢者に対する SD 法によるアンケート調査に基づき、基本統計量分析、探索的因子分析、共分散構造分析により要因間の構造を明らかにする。

2.研究方法

2-1.アンケート質問紙の作成

高齢者の実態を集約し分析するために、質問紙を作成する。従来研究でも行われているように、測定尺度は主観的幸福感を測る尺度として、古谷野[1]の提唱した生活満足度尺度 K（以後 LSIK とする）、ソーシャル･サポートを測る尺度として、野口の提唱した測定尺度を使用する。孫との関連を分析するためは、高齢者にとって最もつきあいのある孫ひとりを対象として、孫に対する情緒的感情と孫との行動についての質問を行った。これらに対し、基本属性を加えた計 38 項目の自記式質問紙を作成した。

2-2.調査概要

調査対象は千葉県松戸市の 2 箇所の老人福祉センターのクラブ活動に通う健康な高齢者とした。調査期間は平成 18 年 10 月 24 日から 11 月 8 日までとし、350 部を配布し、307 部を回収した。有効サンプル数は 194 部（孫あり 160 部、孫なし 34 部）で、内訳は男性が 65 名、女性が 129 名である。平均年齢は 71.76 歳(標準偏差 6.76、年齢範囲 60～94 歳) であった。

2-3.分析手法

高齢者や孫の属性の違いによる LSIK の平均得点の差が有意であるかを調べるために、t 検定を行う。次に、質問紙によって観測された変数がどのような潜在因子から影響をうけているかを探るために探索的因子分析（主因子解、バリマックス回転）を行う。そして、因子分析結果から抽出された潜在因子を基に主観的幸福感の構造に関する仮説モデルを作成し、共分散構造分析を行う。得られたモデルを修正･改良し、適合度の高いモデルを構築する。また、モデルの適合度を評価する指標として、残差平方平均平方根（RMR）、適合度指標（GFI）と自由度調整済み適合度指標（AGFI）の値を用いる。

表 1.生活満足度尺度 K 得点の層別結果

項目		人数	生活満足度尺度Kの平均得	標準偏差	平均値の差	検定
孫	孫あり	160	5.294	2.179	1.000	＊
	孫なし	34	4.294	2.023		
趣味	趣味あり	183	5.213	2.170	1.668	＊
	趣味なし	11	3.545	1.809		

＊: $p < 0.05$

表 2.因子分析結果の固有ベクトル

変数名	因子1 孫に対する情緒的感情	因子2 生活状態	因子3 孫との行動	因子4 ソーシャル･サポート	因子5 年齢
孫と一緒いると元気がで	**-0.858**	0.138	0.164	-0.055	-0.022
孫と一緒にいて楽しい	**-0.741**	-0.032	0.131	-0.137	-0.198
孫に会えないとさびしい	**-0.667**	0.101	0.2	0.017	-0.106
孫との関係に満足	**-0.561**	-0.169	0.157	-0.061	0.016
孫がかわいい	**-0.554**	-0.05	0.104	-0.045	-0.078
暮らし向き	0.131	**-0.64**	0.172	0.001	0.309
健康状態	-0.042	**-0.526**	-0.039	-0.095	-0.136
孫を叱る	-0.092	-0.106	**0.626**	-0.118	-0.265
ご飯を孫と一緒に食べる	-0.367	0.166	**0.566**	-0.09	-0.069
孫と一緒に遊ぶ	-0.407	0.052	**0.553**	-0.06	-0.363
孫にプレゼントをあげる	-0.234	-0.064	**0.339**	-0.052	-0.006
友人サポート得点合計	-0.171	-0.116	0.077	**-0.971**	-0.098
家族サポート得点合計	0.023	-0.045	0.274	**-0.387**	0.213
孫の年齢	0.091	-0.084	-0.126	-0.058	**0.809**
高齢者年齢	0.134	0.074	-0.197	0.036	**0.805**

3. 結果

3-1.分析 1：層別による分析結果

高齢者、孫の属性の違いによる LSIK の平均得点の差の検定を行った結果、「孫の有無」と「趣味の有無」に関してのみ 5%水準で有意となった(表 1)。すなわち、孫という存在と趣味の有無が高齢者の主観的幸福感に与えていることが伺える。また、「高齢者の性別」「配偶者の有無」「孫の性別」「孫との同居有無」の違いによる LSIK 得点の

平均値の差に有意差はなかったことから、これらの属性の主観的幸福感への直接的関係は薄いことが示唆される。

3-2.分析 2：質問紙の因子分析結果

探索的因子分析の結果である固有ベクトルを表 2 に示す。固有値が 1 を超える因子は 5 つ抽出され、その累積寄与率は 0.668 となっている。また、因子負荷量を基に各因子について解釈を行ったところ、因子 1 から順に「孫に対する情緒的感情因子」「生活状態因子」「孫との行動因子」「ソーシャル・サポート因子」「年齢因子」と解釈することができた。

3-3.分析 3：因子分析結果に基づく共分散構造分析結果

図1は3-2により得られた結果を基に共分散構造分析を行い作成した主観的幸福感の構造モデルである。丸の中の文字は潜在変数、四角の中の文字は観測変数、矢印の数字はパス係数、両矢印は共分散を表している。モデルの適合度を示す指標も高く、適合度の高いモデルといえる。また、パス係数の有意水準は生活状態と孫との行動、生活状態と孫に対する情緒的感情を除けば、すべて 1%水準で有意である。

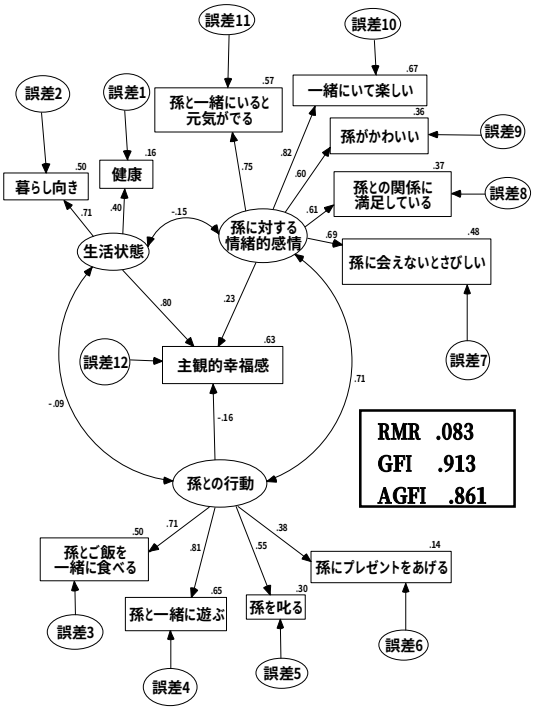

図 1.主観的幸福感の構造モデル

図1より、「生活状態因子」では「暮らし向き」、「孫に対する情緒的感情因子」では「孫と一緒にいて楽しい」、「孫との行動因子」では「孫と一緒に遊ぶ」という項目に、それぞれ強い影響を与えている。また、主観的幸福感に影響を与える要因は「生活状態因子」が高い値を示し、先行研究でも述べられているように主観的幸福感には生活状態が大きな影響を与えているということが確認された。注目すべきは、「孫に対する情緒的感情因子」から主観的幸福感へのパスは正の値を示しているが、「孫との行動因子」からのパスは負の値を示していることである。孫に対する「情緒的感情因子」が主観的幸福感に正の影響を与えるのは、「孫はかわいい」、「孫はいきがい」といわれるように、孫への想いは高齢者の主観的幸福感を直接高める効果があるためと考えられる。一方、孫との行動因子は主観的幸福感に負の影響を与えるが、これは「孫への想い」を伴わない「孫との行動」は高齢者にとって有意義ではないということである。「孫との行動」は、孫を想う気持ちが高まることを通じて主観的幸福感に間接的にプラス効果を生むのであり、気持ちが伴わない場合には煩わしさや疲労を与え、逆に主観的幸福感を下げる要因にもなりえる。

3-4.年齢による構造変化に関する分析結果

高齢者を年齢で二つに層別し、年齢による構造の変化を考察する。60 歳以上 75 歳未満の高齢者を前期高齢者、75 歳以上の高齢者を後期高齢者とし、このグループ間での比較をするため、他母集団の同時分析を行った。その結果、後期高齢者の方が、「孫に対する情緒的感情因子」から主観的幸福感のパス係数は増加し、「孫との行動因子」から主観的幸福感へのパス係数はさらに減少した。

その理由として、高齢者と孫の年齢間に高い正の相関があり、後期高齢者の方が孫の年齢も高いことが挙げられる。一般に孫が成長していくにつれて、孫の学業や仕事上の制約が生じ、高齢者と孫の関わる時間は減少するケースが生じる。また、高齢者の老化と孫の成長により、思考スピード、動作スピードの差が増大し、両者のコミュニケーションに対する感覚のずれが生じ、高齢者と孫との思考能力のミスマッチも生じ易くなる。孫に対する情緒的感情が伴えば良いが、これを伴わない場合の孫との行動は年齢が若い時よりも強い違和感や不快感となって作用すると考えられる。逆に、後期高齢者になっても孫に対する情緒的感情を伴う場合には、高い主観的幸福感を感じることになる。年齢が上がるほど、孫との関係の重要性は高まると言える。

4.考察

本研究は松戸市の老人福祉センターのクラブ活動に通う健康な高齢者を対象とした調査であった。クラブ活動に参加する高齢者は友人とのつきあいが生まれるため、ほとんどの高齢者がソーシャル・サポート項目の友人サポート得点が高かった。そのため、友人サポート得点とその他の質問項目との関連性は見出すことができなかったと考えられる。

健康で、かつ周囲の人の援助にも恵まれている高齢者であっても、表 1 のような結果が得られたことは、孫という存在が高齢者の主観的幸福感に与える影響が大きいということが伺える。

5.結論と今後の課題

高齢者の主観的幸福感と孫との関連について定量化し、要因間の構造をモデル化することができた。その結果、孫の存在は高齢者の主観的幸福感を高めること、さらに高齢者や孫の年齢により、孫の存在が主観的幸福感に及ぼす影響が変化することが明らかになった。

今後の課題としては、さら多くのサンプルを集め、他母集団との比較分析、孫の性別や高齢者の仕事有無などによる層別分析などがあげられる。

参考文献

[1]古谷野亘：“生活満足尺度の構造　因子構造の不変性”　老年社会科学,　12 ： 102-116,(1990)